

報 告

SIG「姿勢保持」講習会 in 大阪・設立 25 周年記念パーティー

静岡県立藤枝特別支援学校 秋本 公志

1. はじめに

2011 年 8 月 27 日に大阪市の南港近くにある森ノ宮医療大学において、SIG 姿勢保持講習会 in 大阪が開催されました。

これまでの講習会は、姿勢保持についての理解啓発を目的とした基礎的な内容の講義を設けていましたが、今回は初の試みとして SIG 会員のみを対象として、「明日からすぐに現場で役立つ実践手法と応用技術」をテーマに、経験者向けの姿勢保持の実践報告や応用技術についてのワークショップ等が行われました。

2. 講習会の概要

基調講演（図 1）では、SIG の代表である東洋大学の繁成剛氏が「姿勢保持の歴史と SIG の役割」と題して、姿勢保持装置の歴史から SIG の活動の歴史、そして講習会の目的と今後の課題について述べられました。



図 1 基調講演

その後は、高齢者と小児の分科会に分かれ、実践報告が行われました。私の参加した小児の分科会では「学校での姿勢保持と活動づくりの考え方とその指導」と題し、北海道真駒内養護学校の石岡卓氏が学校において姿勢保持の重要性を広める取り組みについて述べられました。

昼休みの時間も、各企業の方々のプレゼンテーションが行われ、最新の機器やその活用法に参加者の方々は、昼食を食べる間も惜しんで部屋に詰めかけていました。

午後的小児の分科会では、現場での取り組みの報告が行われ、北海道療育園美幌療育病院の小比賀康彦氏から重症心身障害児（者）施設における施設内や地域間の連携の取り組みについて、岐阜県立希望が丘学園の田本朋巳氏から発達障害児への姿勢保持面の支援について、京都府立与謝の海支援学校の宇治川博一氏と芦原孝野氏から学校で制作した姿勢保持具を使った家庭の支援について、尼崎市立たじかの園の竹中真珠子氏と木崎庸子氏から在宅訪問での姿勢の援助の取り組みについて、といった様々な場面における子どもへの支援についての報告がありました。いずれの報告も、子どもたち個々のニーズをいかにくみ取って適切な支援を行うかを深く考えていて、これから自分の実践に参考になるものばかりでした。

その後、「張り調整の姿勢保持具の体験」、「体圧分布と座位姿勢の計測」（図 2）、「モールドクッションの製作」（図 3）の 3 グループに分かれてワークショップを行いました。私の参加した「張り調整の姿勢保持具の体験」では、背中や腰、臀部の張りを調整することで、驚くほど座り心地が違うことを参加者がお互いに体験してその感想を話し合う中で、普段の実践においても子どもたちの様子をよく観察して、できるだけ負荷の少ないポジションを探すことの大切

さを共有することができました。



図2 体圧分布と座位姿勢の計測



図3 モールドクッショングの製作

最後に、SIG の世話人でもある横浜市総合リハビリテーションセンターの飯島浩氏の司会で、講習会の総括を行いました。各分科会やワークショップの内容が参加者の代表の方によって紹介され、どの分科会、ワークショップでも、参加者の意欲がとても高かつたことが伝わってきました。1日という短い日程でしたが、とても密度の濃い内容であったと思います。

3. SIG 設立 25 周年記念パーティー

今年は、SIG 姿勢保持が発足して 25 年、講習会を単独で開催して 20 年という節目の年に当たるため、講習会終了後、場所を大阪府の咲島庁舎（旧 WTC）

48 階のワールドビュッフェに移して、SIG の設立 25 周年記念パーティーが開かれました（図 4）。

乾杯の後、同じテーブルを囲んだ参加者同士で自然と自己紹介が始まり、講習会の感想やそれぞれが関わっている子どもたちや利用者の方たちに講習会で得られた情報をどう生かしていくか、日頃の実践の様子について、熱心に話し合う姿が見られました。

また、SIG の歴史をまとめたスライドショーが上映され、初期からのメンバーは懐かしい写真を見て様々な思い出を語り合っていました。

最後に、SIG の活動に貢献してくれた方々に花束の贈呈が行われ、拍手のうちに会が閉じられました。



図4 SIG 設立 25 周年記念パーティーの様子

4. おわりに

私は第2回（1993年）の所沢での講習会から、22回中13回の講習会に参加してきました。その中で常に感じていたことは、講習会に参加する方たちの真剣さと講習会を企画運営する方たちの熱意でした。

自分は、重度の障害がある児童生徒の教育に携わっていますが、彼らの日常生活での支援を考える時に、講習会で得られた様々な情報や技術とともに、その真剣さや熱意を思い出します。

今回の講習会と記念パーティーに参加して、これまでに得た様々な情報や技術とともに、出会った方たちの真剣さや熱意を伝えて行かなければならぬと強く感じました。